

山と博物館

第40巻 第4号 1995年4月25日

大町山岳博物館

特集 古幡和敬 写真展「岳をめぐりて」4/16~5/7



写真と文 古幡 和敬

岳をめぐりて

秋深き谷に落ち葉を踏み

若き日の熱き想いを辿りながら

一人登り行く心は寂しいけれど

やがて樹林を抜けて峠に立てば

岳は穏やかな残照をまとい

鮮やかに輝いて美しい

悠久の時の流れと大地の中で

過ぎ去りし日々の想い出と

新たな想いが交差をする

黄昏の徳本峠 晩秋

徳本峠に対峙する穂高や明神岳の岩峰、そこから派生する稜線に、やわらかな秋光が降り注いでいる。やがて六百山の向こうに陽がだんだんと傾いていくと、次第に夜の影が梓の谷から山嶺へ向かってせり上がり、やがて峠にも一日の終りが訪れる。

春から秋、秋から冬へと季節は岳を巡り、時もまた岳を駆ける。

美しく感動的な出逢いを求めながら、私の岳通いもまだまだ続きそうである。

(長野県山岳総合センター職員)

岳わが回想

古幡 和敬

岳への第一歩

私の生まれ育った穂高町牧では、水田用の水は、常念岳や蝶方岳に源を発し流れ下りてくる鳥川から取り入れ利用していた。

「今年は、岳の雪も多いようだが、田の水の心配もいらねえぞ。」

春先になると良く聞かれた言葉である。また晩秋から冬にかけて、常念岳などから吹き下りてくる冷たい風のことを「岳おろし」と呼んでいた。

かつて古老たちは常念岳や蝶方岳のことを岳（たけ）という代名詞で呼び、「山へ行く。」といえば、それは里近くの山に、燃料用の薪を取りに行くことや、越冬用の炭焼きであったり、伐採や造林作業のことで、山と岳という語を使い分けていたのである。

そんなことから幼心にも、岳というイメージは神秘的で奥深く人里ちかくの山とは掛け離れた存在であったように思う。

その三百戸ほどの牧の集落には、西穂高小学校の分校があり、四年生までは分校で、五年生になると四キロメートル離れた本校へ徒歩で通うことになっていった。私の家や分校の付近からだとも前山に邪魔されて、蝶方岳の一角しか見えなかったのだが、本校に通い始めると朝家を出て数分もしないうちに、常念岳の勇姿がいやおうなしに目に飛び込んできた。朝日をあびた岳、暮れなずむ岳、四季折々の常念岳や蝶方岳に接しながらの通学であった。また、その本校の校舎からも校庭からもそれらの山々が常に眺望され、校歌にも常念岳が歌い込まれていた。

六年生になり七月、夏休みの前に、学年行事の常念岳登山が計画されていた。それは、その時の三クラスの生徒全員が、一泊二日の日程で常念岳の頂を極めるという西穂高小学校の恒例の行事であった。

今では、常念乗越へ四時間ほどの所まで車で入ることができるとは、当時は林道が整備されておらず、ずっと下方の鳥川に架けられた橋のたもとから、六時間の長い距離を歩かねばならなかった。

一の沢沿いに続く道を進む、高度が増すと共に気温が下がり、霧がまき、初めて見る高山の花が咲き、常念乗越に出ると更にその奥

遙かに岩の連峰が聳っていた。その中で、このほか鋭く尖った峰は槍方岳であると教えられた。この登山が私にとって、まさに岳への第一歩であった。

穂高中学に進み、一学年では美が原登山、二年生になると常念岳から燕岳へ縦走する二泊三日の集団登山が行われた。晴天の中、常念から燕岳へ終始槍方岳が見え隠れし、その姿が熱く心に刻み込まれてしまった。

三年生の夏休みが近づいたころ、三人の友達を誘い槍方岳登山の計画を立てた。しかし中学生四人による登山など許してくれる家庭などそうあるものでなく、期日が近づくにしたがって、一人減り、二人減りして、とうとう私一人になってしまった。しかし私の槍方岳への想いはそのままに断ち切ることはできず、単独での槍方岳登山となった。

上高地でバスを降り、槍方岳ほどの方向にいいのやら困ったこと。その頃は徳沢から先の梓川の右岸に、穂高新道という道があつて、ガイドブックによるとそちらの道の方が静かであるというのを鵜呑みにし、笹に覆われたその細い道に入り、横尾に着くまで一人の登山者にも出会うことなく、心細い思いをしたこと。殺生小屋付近では霧にまかれ東鎌尾根に出てしまい、初めて岩稜と強風で恐怖感いっぱいになったことなど、数え切れないほどの思い出が残った。

そして今思うに、その時心配であつたらうに、槍方岳に登ることを許してくれた両親には本当に感謝している。

ピッケルの思い出

昭和三十八年四月、大町高校へ入学。入学式が済んで二日後くらいだったと思うが、山岳部の部室を訪ね入部を申し込んだ。高校に入ったら山岳部に入って山に登ろうと、槍方岳から帰って来たら、更に山への想いが強く入り心に決めていたことでもあった。

槍方岳



自分のものを買うように言い渡された。そして父に頼み込み買ってもらった七千円の革製登山靴は夢のような靴であった。その時の県立高校の授業料は一月六千円であつたから、その登山靴のいかに高かつたことか。また、今に比べると、他の登山用品の種類も少なく素材も良くなかつた時代である。

ピッケルもどうしても欲しかったのだが、現金収入の少ない農業を営む両親には言い出すことができず、父の友人のピッケルを借りて使うことになった。

四月の燕岳、六月の針ノ木雪渓での雪上訓練が終わったころ、当時大町駅前にあつたスポーツ店のショールームに、その頃では非常に珍しい形のピッケルが飾られていた。そのピッケルには穴があいていて、そこが真っ赤に色付けされていたのである。

今まで見たこともないその斬新な形といい、その赤色といい私の心を捕らえるのには十分であつた。しかし定価六千円は前述した様に



穂高町からの常念、蝶方岳

大変高額で、おいそれと手に入れることはできず、朝夕の通学途中に眺めるだけの日々がつづいていた。

夏休みも間近に迫り夏山合宿で穂高に行くことが決まったころ、「よし、合宿前にアルバイトをしてでも手に入れてやろう。」と思っただけで、これまたおいそれと良い働き口などない時代でもあった。

幸い家の近くに、常念小屋で使う物資を荷揚げをしている寺島さんという方がいて、夏休みに入った一週間だけ歩荷をやらせてもらえることになった。

いよいよ夏休み、弁当を持って午前五時三十分家を出て、その寺島さん宅に行く。二十キロの荷を背負子につけてもらって六時に出発。現在の林道終点まで約二時間。そこから常念小屋まで四時間。常念小屋で昼食を済ませ、午後一時に下山を始め帰宅するのが五時頃で、夕食が済むと疲れがどっと出て睡魔に襲われ目が覚めるともう翌朝、という生活が一週間続いた。

その時の歩荷料は一キログラム五十円。七千円の大金が手に入った。

早速その金を持ってスポーツ店にとんで行き、念願のビッケルを手に入れたのである。残りの千円は夏山合宿の費用に回した。

誰でも好きな道で飯が喰えたらどんなにいいかと思う。けれどその道に突入してみると、それはそれでまた大変なことだ。しかし、私も好きな山に関わりながら、生活できないものかという気持ちが強くなり、穂高連峰で遭対協の常駐隊員として登山補導や遭難救助に当たったり、昭和四十四年に開所となった山岳総合センターの職員となり、登山講習会や研修会の指導などに携わりながら、二十六年が過ぎた。

わが心の師

三十数年続いている山との関わりの中で、私にとって忘れることのできない、また私が

山の写真を撮るきっかけになった一冊の本がある。それは、田淵行男写真集「尾根路」である。

棺を登ってから山への興味はそこはかとなくふくれ上がり、高校の図書室に行くと山の本をさがし、また書店に「岳人」や「山と渓谷」の新しい号がでると手に入れた。中に載っている写真は、今の様にカラーグラビアが主流でなく、ほとんどが印刷技術も悪く鮮明度に欠けたモノクロームの写真であったが、新しい本を求め初めて聞く時のインクの匂いと、まだ見たこともない、登ったこともない山容に思いを馳せ、胸をときめかせながら読んで記憶がある。

そして、その図書室の数少ない山岳図書の中に、その「尾根路」があった。桑畑を前景にした残雪の常念岳の美しい写真、槍や穂高の岩稜が迫っていた。田淵先生は牧に住んでおられたことがあるので、顔は知っていたが写真との出合いはそれが初めてであった。以



澗沢岳

後、貸出禁止のその写真集を幾度となく図書室に足を運んで見えたものだ。

数年たつてカメラを手に入れ写真を撮る様になって、一度だけ先生に写真を見ていただいたことがある。穂高町のカメラクラブの集まりがあり、私は会員ではなかったがそこに出席させてもらった。先生はその会の顧問をされていた。二枚の写真を出すと、無言でしばらく見ていた後、

「いいですねえ、いいですねえ……でもここをこうするといいですよ。」

そのもの静かではあるが説得力のある口調を、今でもはっきり覚えていて。写真を見ていただいたのは、それが最初で最後であった。残念なことに、先生は数年前に他界された。まいったが、写真集「尾根路」との出合い以来、私の写真の心の師と仰いでいる。

写真展開催にあたって

山岳写真に限らず写真は、撮影することは手段であって、目的は撮影したものを用いた印刷をして、誰かに「見せる」ことだと思ふ。

私が写真をはじめたころは、カラー写真はまだまだはしりの時代で、モノクローム写真の全盛期であった。だから私の使用したフィルムもほとんどモノクロームであった。それは自分でプリントすることも簡単で、引き伸ばしをしては一人悦に入っていたものである。しかし十数年前頃より、写真にのめり込めば込むほど、何らかの形で表すことができないうものかと思ひ始め、個展を漠然とだが考えるようになった。

しかし本来の意欲なども手伝ったり、限られた日程で撮影に出かけても、天候が悪く一枚も撮れなかったり、紅葉に狙いを定めて登って行くと台風で色づいた葉が飛んでしまっていたりなどで、作品作りは遅々として進まず、今回の写真展を迎えることになってしまった。

力量不足であり、また数少ないネガの中から苦労して六十八点を選び、プリントのため現像所に送ったが、あの写真で良かったのだろうかなど心配はつきないものだ。四季折々、そして刻々と表情を変える岳。奥深く雄大で、繊細で美しい岳。私が聞いたその岳の鼓動を、写真を通して少しでも感じただけだと思ふ。

最後になりましたが写真展を開くにあたり大変お世話をおかけしました山岳博物館の職員の皆様方に心より感謝いたします。

【作者略歴】

	古幡和敬 (ふるはた わけい)
1947年	長野県 南安曇郡 穂高町 牧 に生まれる。
1959年	学校登山で初めて常念岳の頂上に立つ。(小学六年)
1962年	槍ヶ岳に登る。(単独・中学三年)
1963年	大町高校に入学、山岳部に入部。北アの山々をめぐる。
1966年	初めて手にいれたカメラで山岳写真を撮りはじめる。
1967年～68年	長野県山岳遭難防止対策協会北アルプス南部地区常駐隊員として槍・穂高連峰で登山補導、遭難救助にあたる。
1969年	長野県山岳総合センター職員となる。以降現在まで山岳総合センター主催の登山講習会等の指導にあたる。
1976年	この頃より本格的に山岳写真に取り組む。
現在	日体協B級スポーツ指導員 (山岳) 日赤救急法指導員 長野県山岳遭難防止対策協会北アルプス北部地区補導員 大町山案内人組合員

ライチョウ保護アンケート調査について

有井 寿美男

野生動物植物は自然環境の構成要因のみならず、私達人類が社会生活を営む上でも重要な役割を果たしています。しかし今、多くの種が絶滅の危機にさらされており、保護に対する強い要望とともに内容も多様化・高度化しております。

このため、希少な野生動物植物の保護管理を積極的に推進するために、平成四年に「絶滅のおそれのある野生動物植物の種の保存に関する法律」（以下「種の保存法」）が制定されました。

林野庁ではこれを受け平成六年度現在十四種について保護管理事業を実施、長野営林局では、「ライチョウ」について平成五年度から松本営林署管内の白馬岳・穂高岳等で保護事業を行っています。

保護事業の内容は、
一、高山植物保護事業も包括し、職員及びラ

イチョウの精通者により繁殖地及び登山道以外への立入禁止柵の設置とその維持管理。

二、生息個体確認。
三、ライチョウの生息・生息状況、取り巻く環境等を掲載したパンフレットの作成。

四、巡視結果に基づき生息地・生育地等の環境の維持整備、採餌場の確保等の環境管理等ですが、保護管理事業を行う中で、より効果的な保護管理を実施していくため、登山者がライチョウに対し、どの程度の知識を持っているか、また、保護活動に対してどのような意見・要望を持っているかを知ることが必要だと考えアンケートにより調査をすることとした。

調査に協力していただいた登山者の数は、一、二六九人と多く、その内容は男性七八二人、女性四八七人、年齢は二〇歳未満 二一九人、二〇～三九歳 五三六人、四〇～五九歳 四四三人、六〇歳以上 七一人でした。

登山歴は一年未満 一五六人、一～五年 四四三人、六～一〇年 二七七人、一〇年以上 三九三人となっております。

ライチョウが法的に保護されているのかの問いでは、特別天然記念物で

高山植物・ライチョウ保護に関するアンケート調査

記入日(平成 年 月 日) 記入場所() 林野庁・長野県林・松本営林署

※記入されている皆さん、保護事業では高山植物保護(ライチョウ)の中心内容であるライチョウ保護事業を行っています。今この保護事業の進捗を、アンケート調査にご協力をお願いします。(結果は必ずお返すさせていただきます)

Q 1 あなたの性別は? ① 男 ② 女

Q 2 あなたの年齢は? ① 20歳未満 ② 20-29歳 ③ 30-39歳 ④ 40-49歳 ⑤ 50-59歳 ⑥ 60歳以上

Q 3 あなたの平日登山はしますか? ① 0-1回 ② 2-5回 ③ 6-10回 ④ 10回以上

Q 4 あなたの登山歴はどの位ですか? ① 1年未満 ② 1-5年 ③ 5-10年 ④ 10年以上

Q 5 今回の登山目的は何ですか? ① 自然保護のため ② 高山植物の観察撮影 ③ 仕事 ④ 登山 ⑤ ライチョウの観察撮影 ⑥ 自然に親しむため ⑦ その他

Q 6 何人パーティーですか? ① 1人 ② 2人 ③ 3-5人 ④ 6-9人 ⑤ 10人以上

Q 7 今回の山は? ① 山小屋 ② テント

Q 8 あなたの高山植物・ライチョウ保護のためにバトロール員がいることを知っていますか? ① 以前から知っている ② 今回の登山で知った ③ 知らない

Q 9 この山のゾリ(熟練状況)はどうですか? ① 大変良い ② 良い ③ まあまあ良い ④ 良くない

Q 10 ゾリについて意見をお聞かせください。 ① 自分のゾリは責任を持って持ち帰るべきと思う ② 山小屋等で受け入れられるべきだと思う ③ ゾリ捨てを希望する(お返さず) ④ 現、地方自治体幹部が責任を持つべきだと思う ⑤ その他

Q 11 高山植物について (1) あなたの高山植物を何種知っていますか? ① 全く知らない ② 1種程度 ③ 2種程度 ④ それ以上 (2) 高山植物の保護状況をどう思いますか? ① 大変良い ② 良い ③ まあまあ良い ④ 良くない (3) あなたの高山植物を無断で採取することは適切でないと判断されることを知っていますか? ① 以前から知っている ② 今回の登山で知った ③ 知らない

Q 12 ライチョウについて (1) ライチョウを知っていますか? ① 知っている ② 知らない (③ どのくらいかは回答がなかった) (2) ライチョウを直接見たことがありますか? ① ある ② ない (3) ライチョウは何を食べているか知っていますか? ① 知っている () ② 知らない (4) ライチョウは糸状菌からなる菌類であること知っていますか? ① 知っている ② 知らない (5) ライチョウは日本に何回も来知っていますか? (約) ① 500回 ② 1000回 ③ 3000回 ④ 1万回 ⑤ 3万回以上 (6) どこに生息しているか知っていますか? ① 知っている () ② 知らない (7) 天敵は何か知っていますか? ① 知っている () ② 知らない (8) ヒナの成育率はどの位だと思いますか? ① 5% ② 15% ③ 30% ④ 55% (9) 別の天然記念物であることを知っていますか? ① 知っている ② 知らない (10) 野生動物植物としての指定決定されたことを知っていますか? ① 知っている ② 知らない

Q 12 高山植物・ライチョウ保護についてご意見がありましたら、お聞かせください。

ご協力ありがとうございました。

あることは九二%とほとんどの人が知っていましたが、種の保存法の指定については四七%と、制定されてから、二年の経過といふこと半数以下にとどまりました。

ライチョウの生息地・食べ物・天敵等の生活形態の問いでは、生息地・食べ物・天敵等すべてを知っていると答えた人は、全体の二一%にとどまり、特に二〇歳未満では八%、二〇歳台では一六%と低い数値となりました。

天敵として人間と答えた人が二五%おり、人間の及ぼす悪影響を感じている人が意外と多いことが判りました。

ライチョウが遺留鳥であること・生息数・ヒナの成育率についての問いでは、三問とも知っていた人は全体の九%と少なかつたですが、六〇歳以上では二一%と五人に一人が知っているという結果が二一%と五人に一人が知っています。

以上のことから、ライチョウが法的に保護されている貴重鳥であることは漠然と承知はしているものの、生息数・ヒナの成育率などの詳細な部分までは知らない状況であることが判りました。

次に現地の環境に対する意識調査の問いで、保護バトロール員を知っていますかでは、以前から知っていると答えた人は五九%、今知ったが一七%と登山者の多くがバトロール員の存在を意識していることが判りました。

これを登山歴別で見ると登山歴一〇年以上では約九〇%が以前から又は、今回知ったと答えています。

登山歴一年未満でも四四%の人が今回の登山で知ったと答えており、バトロール員の活動が登山者のほぼ理解され、効果が上がっているものの、登山者には保護活動のPRが不足していることを反省させられた。

採餌・天敵の侵入にも係わりのある、現地のゴミ処理状況をどう思いますか問いでは、大変良いと答えた人は三三%、良いは四二%、まあ良いは二〇%、良くないは五%でした。

ゴミ処理の方法の問いでは個々が持ち帰る

べき八七%で、特に五〇歳以上・登山歴一〇年以上の人に多かつた。

その他、山小屋が処理すべき、ゴミ捨て場を設置すべき、国や地方公共団体が責任を持つべき等の意見があり、これらの場合は有料でも良いと答える人が大半を占めました。

その他の意見としては

一、保護についてもっとPRをすべき。

二、入林者の人数規制をすべき。

三、入林料を徴収すべき。

四、違反者への罰則をもっと厳しくすべき。

五、立入り禁止区域の明確化を図るべき。

等の意見がありました。

今回のアンケート調査の結果から現地の保護活動も重要ですが、一般の人達へのPRが不足していることを痛感しております。

最後に今回の調査結果を考慮し、登山者をもとより、平地でも工夫したPR活動も含め、なお一層充実したライチョウ保護管理事業を行っていきたくと考えておりますので、皆様の更なるご指導ご協力をお願いします。

(松本営林署 大町森林管理センター副所長)

山と博物館第40巻第4号

発行所 千歳長野県大町市 TEL 〇二一

印刷所 長野県大町市依町 大町 山岳博物館

定価 年額 一、五〇〇円(送料共、切手不可)

郵便振替口座番号 〇五四〇七三三三三


